

第二期 第二一一号

(初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2025. 10. 10

定有堂書店 発行

存在が花する

「縦」でも「横」でもなく

感謝を込めて (2)

正夢のような

追いかけて

日々是雑言 (そうごん) 9

始まりと終わり日記

Ballad of A Landlord

本を作る側から (31)

内坪井町日記 (17)

論語について (5)

花鳥風月

オトラントの彼方へ〜紀田順一郎氏逝くムラカミヒロミ

やっと実感が湧いてきた イギリス留学記① 三浦永理

列車と冬瓜

編集後記:

奈良 敏行

岩田 直樹

白井 明大

板野 円香

おぎはらきえ

萩原 俊郎

鳥居 貴彦

高木 善祥

村瀬 謙介

齊藤 仁昭

小原 修治

古賀 啓三

あきの素生

ドラメリア

存在が花する

奈良 敏行

(定有堂 主人)

蔭山さんの作品集『迷妄蒙昧』を読んだ。「蔭山」というのは文学フリマや一箱貸出し棚などに参加するときの屋号だ。『音信不通』の仲間でもある。定有堂教室の「読書室ビオトープ」は小説の読書会だが、その創設時のメンバーでもある。

わたしは日頃、読書のトライアングルを、読む、語る、書くと考える。このトライアングルを生きる五人の人たちが「らくだのこぶのビオトープ」という同人会を立ち上げている。その中の一人だ。

蔭山さんの作品には興味をひかれる。作品に漂う「深みの暗さ」が気になる。文学は戦後文学ですよねと言っていたのを覚えている。戦後の文学の「暗さ」は荒廃と再生のあいにある。八十年後に甦るこの「暗さ」は、同様に明るくなる前の暗さなのだろうか。

《物置のような部屋に住んでいた。私が小学生の頃に両親

が離婚し、母と姉と私は2DKのアパートに引っ越した。《当時勤めていた会社は離職率が高く、入社当時二十人以上いた私の同期は十年も経たずしてほとんど辞めていた。》家庭の環世界と職場の環世界のことを書いています。蔭山さんのこの短編集の作品はそれぞれ先行作品へのオマージュに絡めて成立している。収録された七つの短篇の内四つは、吉田知子作品に紐付けられている。

蔭山さんは何を描きたいのだろうか。その初発衝動のありが気になる。吉田知子には「脳天壊了」（のうてんふあいら）という作品がある。「迷妄蒙昧」とは「脳天壊了」の謂なのだ

旧満州から引き上げてきた二人の男の物語だ。脳天壊了とは、たががはずれてしまったことを示しているようだ。人間存在の破壊された日常を語るには、ありえようもなく思いがけない言葉が必要だ。そこでは言葉が「事件」となる。それが「脳天壊了」そして「迷妄蒙昧」だ。つまり、蔭山さんの存在の「暗さ」を開示することを可能にした、言葉の発見だ。

存在は「事件」する。「事件」とは花のようなものだ。《美しい「花」がある、「花」の美しさという様なものはない。》

小林秀雄の「当麻」の中の言葉だ。存在者は刹那に生成

し消滅する。この「刹那」にしか存在は現れようがない。それを「事件」という。

蔭山さんの「存在」は作品のようにクソ貧しいのかどうかは知らない。表現は「存在」を「花」するものだ。蔭山さんの「存在」は、目の前の「花」を解体しないではおかないものだ。太宰治の「トカトントン」もそういう文脈で引かれる。蔭山さんの場合は激烈な「カアツ」というカラスの鳴き声が刹那の逡巡を射抜く。この言葉が聞こえてくると虚無におちいる。

「虚無」とは何だろう。何も無い「無」とは違う。あえていえば「非有」なのだ。「有」が解体されたところに「非有」が現れる。つまり分節されない混沌だ。

わたしたちは本を読んでいる。そこにある入口は、混沌と秩序の絡み合いなのだ。怒りは秩序を解体する。そして混沌に襲われる。混沌こそが真実なのだ。実感がそこにあるということだ。

蔭山さんは、吉田知子に出会い、「脳天壊了」という言葉を知る。たぶんそれは蔭山さんにとっては存在が花するに等しい。クソばかばかしい日常の理不尽さ、そこで自分の精神状態や思考は混沌とならざるをえない。苦悩は苦悩を言葉にできれば、その出口を見出す。明るさの前の「暗さ」になる。だからその言葉は「事件」なのだ。そしてそ

れが「脳天壊了」であり「迷妄蒙昧」だ。

吉田知子の「脳天壊了」は『父の墓』（新潮社）という短編集に収納されている。あるいは蔭山さんが寝落ちし左手が押さえている写真を見ると、『吉田知子選集Ⅰ 脳天壊了』（景文館書店）が愛読書のような。また自宅の本棚写真には『お供え』をはじめ二十数冊の吉田知子作品が並んでいる。

《「書く」とは書き出すこと、何かを存在にまで引き出してくること》

これは井筒俊彦の言葉だ。さらに次のようにもいう。

《この世に存在すると考えられる事物は、すべて「無」すなわち絶対無分節者が、様々な形で自己分節していく「出来事」の多重多層的な広がりになすぎません》（『意味の深みへ』）

蔭山さんが発見した「脳天壊了」は、クソばかばかしい日常を解体し、作品という「出来事」に甦らせていく。そこに「迷妄蒙昧」が始まる。

存在の中に「非有」はあるが「無」というものはない。

「非有」は文節以前で、分節されて「有」となる。合い言葉は「脳天壊了」だ。

2025. 09. 21

蔭山『迷妄蒙昧』2025

小林秀雄『モオツアルト・無常という事』新潮文庫 1961

太宰治『ヴィヨンの妻』新潮文庫 1950

『吉田知子選集Ⅰ 脳天壊了』景文館書店 2012

井筒俊彦『意味の深みへ』岩波文庫 2019



## 「縦」でも「横」でもなく

岩田 直樹

(再解釈本舗・「読む会」講師)

八月下旬の「読む会」、九月上旬の「ドウルーズを読む会」で、奈良さんが『斜め論』という本が面白いですよ」とおっしゃっていた。ここ半年、ある思想家のことを調べており、すぐに読もうという気にならなかった。九月中旬になって一段落ついたので、松本卓也『斜め論 空間の病理学』筑摩書房、二〇二五年八月刊)を読んでみた。

奈良さんから「斜めの哲学」と聞いたとき、「縦」と「横」の対立について政治形態、哲学の方法、教育現場の職階制の三つの連想が頭の中を巡った。

まずは、ホッブスとアーレント。

ホッブスによれば、人間の本能は自己保存にあり(自然権)、自然状態では「万人の万人に対する闘争」がやむことなく続いていく。暴力による闘争(死)を防ぐためには、各人の自然権をただ一人の主権者(リヴァイアサン)に委ねればよい。この考え方の極致?が、ナチス政権にすべての立法権を与えた「全権委任法」(一九三三年)であろう。

「公共性」の哲学者アーレントは名著『人間の条件』で「活動的生活」を「労働」「仕事」「活動」に分類した。アーレントが最も重視したのが「活動」である。「活動」は「現われの空間」である公的領域、人間関係の網の目において開始される。一つの「活動」が新しい「活動」の原因となる。人間は自分たちがはじめた「活動」をコントロールできず、「活動」がもたらした意図も予見もしなかった帰結に責任を問われることになる。

次に、ヘーゲルとメルローポンティ。

ヘーゲルの弁証法は、矛盾 対立を揚棄(福本和夫による訳語)することで、「意識そのもの」↓「自己意識」↓「理性」と上昇し、最終的には「絶対知」に達する。四〇年近くも前に『精神現象学』を読んだときの驚きは、今でも忘れることはない。こんなこと(精神の弁証法的な道筋)を考へつく人がいるのか。どこからこんな発想が生まれて来るのか。最も感動した哲学書だと言える。

メルローポンティは現象学の限界に気づいていた。主体の側から、存在の外側から存在を覗き見るだけでは、間身体性を十全に描写できるはずがない。視座を主体から存在の内に移すことによって、存在の内部から従来とは全く異なる相互滲透、相互越境、相互蚕食の新たな哲学を開拓しなければならぬ。彼が到達した「肉の内部存在論」は、「世界

が身体の双葉のあいだに挿しこまれたり、私の身体がもうもろの物や世界の双葉のあいだに挿しこまれる「遺稿」見えるものと見えないもの」といった奇妙な言葉で語られる。その奇妙さは後期レヴィナスの代表作『存在するとは別の仕方、あるいは存在することの彼方へ』に匹敵する。

そして、「ピラミッド型」と「ナベブタ型」。ここまでの上空飛翔的な哲学の話とは打って変わって、多くのステークホルダーに翻弄され、地べたを這いつくばって日々を乗り切っている（乗り切れないことも多々ある）教育現場の話である。

戦後の教育現場は長らく「ナベブタ型」であった。ヒラ教員集団の上に、教頭、校長がナベブタのように付いていた。出世意欲の旺盛な教員は「ヒラメ先生」と呼ばれた。

「ナベブタ型」が揺らぎ始めたきっかけは二〇〇〇年の学校教育法施行規則の改正である。それまで法的根拠がなかった職員会議は初めて法律上に位置づけられる。慣例として学校運営上のさまざまな決定（すべての事項ではない）を行ってきた職員会議は、「校長の職務の円滑な執行に資するため、職員会議を置くことができ」「職員会議は、校長が主宰する」と定められ「校長の補助機関」となった。

第一次安倍政権（二〇〇六—〇七年）の教育改革は「ピラミッド型」への移行の決定打となった。学校教育法の改正によって副校長、主幹教諭、指導教諭が新設され、校長、副校

長、教頭、主幹教諭・指導教諭、教諭、講師（常勤・非常勤）の職階制が完成した。ちなみに東京都では、校長の上に統括校長、主幹教諭の下に主任教諭が置かれている。

「縦」と「横」。どちらにもメリット、デメリットはある。私が三〇年以上勤務した教育現場でも、「縦」の過度の強化は組織の士気を減退させ「横」の行き過ぎは組織の決定力、機動力を低下させることになる。

三〇〇頁もある哲学書だから何日かかるだろう。覚悟して『斜め論』を読み始める。これが刺激的で面白いのである。なんと半日で読み終えることができた。このボリュームの哲学書では最速記録である。巻末の人名索引で主だった登場人物を拾うと（五〇音順）、上野千鶴子、ウリ、ガタリ、木村敏、ドウルーズ、中井久夫、信田さよ子、ハイデガー、ビンスワンガー、フーコー、フロイト、向谷地生世良、ラカン……。

ウェブで「NHK読むらじお 斜め論」と検索すると、著者インタビュー（マイあき！八月一〇日分）が載っていて、序論として参考になる。「斜め横断性」（ガタリ）に導かれて、現代思想入門を兼ねて読むのも一興であろう。

## 感謝を込めて(2)

白井 明大

(詩人)

前回につづいて、この場をお借りし、『ヘリヤ記 II』展に多大なるご尽力をいただいた方々の展覧会紹介文を再掲したい。心から感謝を込めて。

〈本づくりをともにした方々〉

カシワイ Kashiwai

初めてカシワイさんに挿絵を描いていただいたのは、月刊絵本『ごもものとも』の付録冊子で三年間連載したエッセイ「季節のうたごよみ」でした。二〇二〇年には、私の詩とカシワイさんの絵の詩画集『いまきみがきみであること』(書肆侃々房刊)を上梓。ふしぎなやわらかさの中に、生きていく心ぼそきと生命へのこまやかなまなざしを宿した絵が魅力的です。

辻 祥江 Yoshie Tsuji

『日本の七十二候を楽しむ——旧暦のある暮らし——』や『日本の憲法 最初の話』など私の本の装丁を数々手がけていた

だいています。「歌ころかレンダー」の紙の選定も辻さんの仕事です。今回『ヘリヤ記』の装丁では、タイトルのオリジナルロゴを一目見てよろこびがこみあげました。私がもつとも信頼を寄せている素晴らしい装丁家です。

〈参加作家紹介〉

嘉瑞工房 Kazui Press

文字がかすれたり、紙が凸凹したりして味わいがあるのが活版印刷かといえそうですが、と教えてくれたのが嘉瑞工房の高岡昌生さんでした。詩篇「波照の舞う」や第六詩集『三十三センチの時間』をはじめ、くつきりとした文字がほとんど凹凸なく刷られた活版印刷を手がけていただいています。詩篇の組版とともに美しく仕上がったポストカードをお楽しみください。

山下昇平 Shohai Yamashita

いっしょに詩の朗読舞台を上演したり、カフェで注文式の人形朗読劇を披露したり。人形作家であり舞台美術家でもある山下さんとの付き合いは二十年ほどになります。風通しのいい自由さを身にまとう、無尽蔵な創造力の塊のような人です。ビークルの立体作品にも驚かされましたが、ステンドグラスと登場人物たちの絵は物語の重要な一幕で、心を

衝き動かされます。

〈選書コーナー〉

展覧会場の「森の生活者」にて、私が『ヘリヤ記』を執筆するにあたり影響を受けたファンタジーをはじめとする愛読書を何冊か選書、紹介した。小・中学時代から二十代にかけて読み耽ったもの、近年読んだもの、いずれも著名な名作ばかり。

斎藤惇夫『冒険者たち』

小学六年生のとき、あまりに面白くて寝る間も惜しむ読書体験を初めて知った。

ミヒヤエル・エンデ『はてしない物語』

物語の声が、本の中から聞こえそうなほど。エンデに惹き込まれていた出会いの本。

アーシユラ・K・ルীগウィン『ゲド戦記』

名作中の名作。とくにⅡ巻が好き。世界に対する思慮深い語り。

アーシユラ・K・ルীগウィン『いまファンタジーにできること』

ファンタジーって何だろう、という問いを抱えながら読む楽しみ。

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』

中学時代、通学電車の行き帰りにいつも読んでいた。詩を書き、童話を書く人の姿が心に焼き付いて。

カート・ヴォネガット・ジュニア『スローターハウス5』

絶望とユーモアをともに書くことは、底が抜けた世界を乗り越える思想かも。

J. L. ボルヘス『伝奇集』

人間の想像力は、ここまで突き抜けるのか…と途方もない気持ちになったのが二十代の頃。

ファン・ジョンウン『ディディの傘』

世界の秩序がゆらぐ時代の中で、人間性の灯し火が切実にゆらめく読後感。

知里幸恵編訳『アイヌ神謡集』

うたうこと。この世界を。自然の恩恵と、畏敬の念を。詩の古い古い役割、大切な大切ないのちと言葉。

# 正夢のような、

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

最近、嬉しい発見をした。倉敷市で暮らす私にとって、岡山市へ行くのは月に一度ほど、実地型研修(今となつては珍しい)や打ち合わせの時くらいだ。九月某日、セミナーの帰りに思いがけない出会いがあった。

岡山駅から一キロほど東にいった所に、表町商店街というアーケード街があるのだが、かつては四百軒近い店が連ね賑わいを見せた通りも、今では三百店舗ほどに減少し、所々にシャッターが目立つ。そんな場所に、新しい本屋が生まれたというのだ。足を向けてみると、老舗百貨店「天満屋」の向かいに「正夢書房」と書かれた店が鎮座していた。レング通りの一角、以前から存在していた風なその佇まいに、まさに正夢のような印象を抱く。

はやる気持ちを抑え店内へ。正面直ぐに、背の低い四角柱の書棚。そこに並ぶのは古典から現代の作品まで、オーナーが選んだ推し本たち。リバイバルされたのだろうか、フィ

リップ・K・ディックの『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』の特装版が置かれている。欲しい…が、六千円もするので諦める。さらに進むと、奥行きが長い建物の形状に合わせ直線状に伸びる三列の書棚が見える。その一面を埋め尽くすように幻想文学、哲学、人文、有名な世界文学の本らがみつちりと、だが整然と収まっている。

「凄いい書棚ですね」と私。

「全てオーナーが選書しているんですよ」と定員さん。

聞けば、置く本の選定はオーナー自ら行っているが、本の並べ方、紐づけ方は店員に一任しているらしい。大型書店で見えないような独創的な並びに見惚れてしまう。次いで、「ここは文学メインですが、実はジャンル違いで三つの系列店も先月オープンしたんですよ」との情報も得、早速向かうことにする。

◇正夢書房(本店)…文芸書メイン

◇ハー・ストリー…絵本・ファッション誌専門

◇ヒズ・ストリー…歴史・スポーツ誌・建築関係

◇アジュードル…美術専門

このうち「アジュードル」を訪れると、そこはまるで美術商の家に迷い込んだかのような空間であった。アンティーク調の鏡台や食器棚にディスプレイされたアートブックたち。装飾品のように置かれた本らが独特なオーラを放っている。



そもそも、ヤン・シュヴァイクマイエルの『不思議の国のアリス』が面出しで置かれていた時点で、良い店に決まっているのだ。他には、ブリュッゲルの面集や大正期少女漫画の資料集など、チエーン書店では見えないようなラインナップ。売れ筋ではなく「興味深い本を提供したい」という、オーナーの心意気が伝わってくる。

それにしても、に何故これほどまで個人書店に惹かれるのか。理由はやはり、本屋の持つ物質性と空間性にある。

もし目的の本だけを手に入れるなら、大手のネットストアに勝るものはない。検索一つで欲しい一冊にたどり着けるからだ。しかし、本屋に足を運ぶと、しばしば予定外の数冊を抱えて帰る羽目になる。それも、読んだことのない著者、自身の嗜好とは全く異なる分野の本を購入していることも少なくない。何故、本屋だとこんなにも「寄り道」してしまうのか。

それは、本屋という場所が、自身の認識外に広がる世界へといざなう、立体的な仕掛けがあるからだと思う。本棚の高さや並べ方、隣り合うジャンルの組み合わせ。そうした空間的な配置に、店主の思考や好み、そして文脈が滲んでいる。本屋には独自の物語性が存在する。

正夢書房で品定め中、白髪のご婦人が話しかけてきた。

「こういう書店、最近ないから嬉しいわね」

全くもって同感だ。何でも揃うネットストアは、結局、何でもは無い。店主の選んだ有限の本棚だからこそ魅力があり、そこに立ち会う人同士、利害や世代を超えて言葉を交わす場が後発的に生まれるのだ。

更に本屋は、物質的な本の魅力を、身体性を通じて提供できる場所でもある。正夢書房では、多くの本が面出し、若しくは平積みで置かれている。

『デザインや装丁、肌触りも含めて楽しんで欲しい』

そんなオーナーの心映えに、書籍が売っているのは情報だけではないことを改めて認識する。

気がつけばトートバッグは本でパンパンになっていた。ル・ミラー『魚が存在しない理由』、ヴァッツァーティ『ババウ』、池辺一郎訳『ルドン 私自身に』、そしてパウル・クレール『造形思考』上下巻。結局のところ、「高いから」と諦めた本以上の支出となってしまうた。

帰宅後、『魚が存在しない理由』を少し読み進める。学術的な本かと思いきや、いつの間にか著者の構成した形而上学的な世界へ飛び込んでしまっている——気づけば最初泳いでいた場所と別の海域に身を置いている。本屋における読書体験もまた、同じであろう。

## 追いかけて

おぎはら きえ

(蔭山)

夏が終わった。

この原稿を書いている九月下旬現在、朝晩は涼しくなつたが日中はまだちよつと冷房を点けたくなる暑さだ。どうですか、本誌が発行されている十月中旬、ちゃんと秋は来てますか。まだ半袖着てやしませんか。でもとにかく、私の二〇二五年の夏は九月十四日をもってして終わった。

九月十四日、大阪で開催された文学フリマに出店者として参加してきた。

昨年の秋、定有堂教室「読書室ビオトープ」の参加者から文芸サークル「らくだのこぶのビオトープ」が結成され、今年の二月に広島で開催された文学フリマにはメンバー五名が各々書いた作品を出品した。私は又吉直樹の『第2図書係補佐』（幻冬舎）を読んで「こんなエッセイを書いてみたい」と思っていたので、少ないページ数だが初めてエッセイ集『迷妄蒙昧』を書いて出品した。初めて参加した文学フリマは想定外に熱気があり（なんかもつと陰気なイメージがあった）、三〇〇近い出店者と個性豊かな作品に大い

に刺激を受けた。イベント終了後、メンバーとファミレス（鳥取にはないロイヤルホスト）で打ち上げをした。「次はどうする?」「九月に大阪であるよ」「次はみんなで一冊作ろうよ」「いいねー」とその場のノリで「砂」をテーマに五版二十ページを条件に各々が小説を書いて一冊にまとめるということになった。祭りの後の興奮冷めやらぬテンションで「いいねー」とばかり返事をしていたが、実質十ページ足らずのエッセイでひいひい言つて書いた私が二十ページの小説で。

その昔、村上春樹が「小説のアイディアはどうやって出てくるのか」という読者からの質問に対して「ある日、ドアがノックされて開けてみるとそこには小説さんが来ていて『どうぞ僕を書いてください』と言うので書いてあげるんですよ」というような回答をしていた。その記事を読んだから十五年以上経っていると思うが私のもとはその小説さんがやって来たことはない。

広島から帰った後もメンバーとオンラインでミーティングを重ね、締切りを七月某日に決め、誌名を『砂塵 SANDINE』に決め、役割分担を決めた。そして他のメンバーは着々と書いているようだが、私のもとには小説さんが一向に来ない（みんなのそこには来てたのか?）。六月下旬に、もういいいよばいといひにこちらから小説さんを探しに行く

ことにした。小説さんの足跡らしきものを追って追って、なんとなくシルエットが見えてきて、だんだん接近して、小さな小さな小説さんをなんとか捕獲した。

原稿を書きながら頭の片隅ではもうひとつ気になることがあった。このサークル初の小説集『砂塵 SA-ZINE』をどうやって売るか。初心に戻って文学フリマのサイトを改めて読んでみた。

文学フリマは、作り手が「自らが〈文学〉と信じるもの」を自らの手で販売する文学作品展示即売会です。（サイト冒頭より）

ぶ、文学と信じるもの、ですか？

果たして自らが〈文学〉と信じるものとはなんぞやと思いつながら小説を書き進めていた七月下旬、音楽雑誌ロッキング・オンの創刊者、渋谷陽一の訃報が流れた。以降、新聞などで追悼記事など関連記事を多く目にした。ロッキング・オン創刊メンバーの一人でもある橘川幸夫の著書『ロッキング・オンの時代』（晶文社）もそんな記事の中で紹介されていた。渋谷は高校生の頃から音楽雑誌にレコード評を投稿し、十九歳でロック喫茶でDJをし、小規模ながらもコンサートを主宰していたという。そして一九七二年、二十一歳で投稿していたロックのミニコミ誌を乗っ取るような形でロッキング・オンを創刊する。三号までは自分達

で営業して配送もしていたが、四号からは東販（現トーハン）などの取次と交渉、契約して全国の書店へ販売網をもつた。

すごいなあ、渋谷陽一には若い時から自らが信じるロックが確立されていたのだろう。

感心している場合ではない。我々も売らなければならぬのだ、自らが〈文学〉と信じるものを。…だからそれが何？

そして自らが信じる〈文学〉とは何か謎は解けぬまま迎えた当日。出店ブースは一四〇〇余。そんな中でも我々のブースは入り口入ってすぐのところであラッキー、かと思いきや入場の勢いに乗ったお客さんはこちらのブースの前をザーザー流れるように奥に進んでいく。会場を回ってみれば幅九十センチのブースが両脇に延々と並びめまいがする。自らが信じる〈文学〉が確立されていない私は湖に落ちた葉っぱの如くたゆたうしかなかった。

『迷妄蒙昧』『砂塵 SA-ZINE』他、メンバーの作品も SHEEP SHEEP BOOKS に置いていますので読んでみてね。

定有堂倉吉支店 その七十

## 日々は雑言（ぞうごん） 9

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

### コクセイ調査

「国勢調査員」というものを体験した。身分上は「非常勤の国家公務員」だそうだ。つまり守秘義務がある。以前「裁判員裁判」も体験したが、どちらも相当、アラが目立つ国家のお仕事である（裁判員については後日、守秘義務に反しない範囲で問題点を書いておきたい）。

まず調査員は担当地区を回って、白地図の上に鉛筆で（一）各世帯に一つずつ番号を振っていく。そして、その全世帯の住民に調査票の入った袋を手渡し、「ネット回答にされますか、それとも郵送、回収？」と面談するまで、昼夜問わず、ひたすら訪問して回るのである。

なんとも旧時代的、アナログな方法。

家族で住んでいる一戸建てならいいが、アパートは住んでいるかどうかさえ、怪しい。一戸建てでも、ピンポンは鳴るが玄関は草ボウボウで、「もしや空き家、それとも急な入院か介護施設か…」と戸惑いながらも、こちらに知るすべはない。そこで仕方なく夜間に訪ねて電気が点いているかどうか、また近所に「こちらの方どうされていますか」と、当世では御法度の「身の聞き込み調査」までしなければならぬ。

バイト代は出るが（1地区で4万円余り）、こんな仕事、だれもしたくないから、最終的に私のような町内会の役員に回って来る。とほほ。

5年に1度の国勢調査の経費は、調査員への報酬や用紙印刷、広報など971億円。ただし県や市町村の担当職員の人件費などは含まれていない。ここまで手間と税金をかけて分かるのは、世帯構成や生業（なりわい）、持ち家かどうか、など単純なものばかり。

国勢調査は大正9（1920）年に始まった。なんと百年以上の歴史がある。スマホによるネット回答は導入されたが（高齢者以外はほとんどこれを選択）、住民台帳が電子化され、マイナカードも8割普及している今、これらを活用すれば、人も金も大幅に省けるのではないか。

これで5年に1度、メシを食っている業者もいっぱいいる

のだろうが、「情性で生き続ける日本」を象徴する国家事業ではある。

「べらぼう」の隠し味

NHKの大河ドラマ『べらぼう』は、自由な田沼意次の時代から、規制だらけの松平定信の時代へ、物語は佳境に入った。とどこどこで意外な俳優のキャスティングがあつて楽しめるが、その他にも、この大河ドラマにはちよつとした「隠し味」が潜んでいるようだ。

日々強まるお上の圧力。江戸の出版界の風雲児、主人公の薦屋重三郎が「ちとらはさんざん締め付けるくせに……」と舌打ちしたあと、「なんでも書き放題の読売には、お上が内通していやがる」と語るセリフ。思わず「おっと、なかなか分かつてるじゃん」とニヤリとした。

ドラマでは「読売」という某大手新聞社と同じ名がやたら連呼される。実は「瓦版」は幕末以降の呼称で、江戸時代、読み聞かせながら街頭で売る印刷物はもっぱら「読売」と呼ばれた。薦屋は「田沼派をやり玉に上げる読売は、きつと定信の差し金に違いねえ」と見抜いたのだ。

すぐに思い出したのが、2017年5月、読売新聞の社会面に大きく載った「前川前次官、出会い系バー通い、文科省

在職中」という「スクープ記事」。文科省の前川喜平前次官は、加計学園の獣医学部に便宜を図る「官邸のご意向」に抵抗したことで知られていた。

「援交」をにおわすこのスキャンダル、他紙が取材すると、あつけなく「濡れ衣」と判った。前次官はバーで働く女性たちの相談に乗っていただけだった。女性たちに会えばすぐ分かるのに、読売新聞は裏付けの取材もせず、官邸筋から意図的に流された情報に飛びついたのだ。

安倍一強時代、電波法の歪曲など言論統制が強まる一方、政敵をつぶす、あるいは脅すため、こつした監視と情報リークが横行した。松平定信の時代と似ている。

実はNHKはあの読売新聞の記事にひるんで、前次官のインタビュの放映を見送った後ろめたい過去がある。よりにもよってそのNHKの、それも大河ドラマにするりと権力と読売新聞の癒着を連想させるあのセリフを忍ばせたとしたら、『べらぼう』の脚本家は、まさにお上の目をくらます江戸の戯作者並み、「恐れ入谷の鬼子母神」である。

ところで、スクープ記事を書かせた読売新聞の編集幹部は、更迭どころか出世を果たした。それ以来、私はあそこをまともな新聞と認めていない。

# 始まりと終わり日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

とても暑い夏だった。暑いといろいろなことが停滞する。ひとは出歩かない。本は売れない。本屋にやる気はない。

油断して昼寝などしているとKさんが汗を拭きながらやってきた。「本を整理しようと思ってるね」どうやら今すぐには、というわけではなさそうだ。「もう読まない絵本とかいっぱいあつてどうしようかと思ってるの」まだ手放したくない本もあるらしい。話し方に迷いがある。「ここに持つてきても売れそうにない本もたくさんあるしねえ」雑誌などもたくさんあるという。売れそうな本、売れなさそうな本はどうやって決まるのか。線引きするのはいつもむづかしい。ここに年中座っているひとにもわからないのだが、三ヶ月ぶりくらいにふらつとやってきたKさんにはわかるのだろうか。でもKさんはまだ迷っている。どうやら運ぶのが重いとか、暑いからそんな作業したくないといったことでもなさそう。話しながら自分がこれまで買った本、集めてきた本を

記憶の中で眺めているようだった。

本には始まりと終わりがある。始まりは企画を立てるところ、なにか思いつくところ、いろんなところからはじまる。らしい。では終わりはどうか。ずっと本棚にしまわれて化石のようになってる本もある。でもそれは終わりなのだろうか。まだなにかを待っているようでもある。古本屋に売られ、次のひとに渡っていく本がある。終わりではない。次の始まりだ。ぐるぐると縛られ、道端で古紙回収を待つだけの本。彼らは本としての役割は終えたのかもしれない。紙として生きる道が始まる。本屋に並んだものの、手に取られることなく返品される本もある。もう一度出荷されることもあるし、もうされないこともある。かつて、物流の倉庫を見学に行ったことがある。高い天井の鉄の倉庫に本の塊が詰め込まれ、それはもう本ではないにか別のものにしか見えなかった。

終わりを決めるのは持ち主だ。まだ手元に置いておく。もう手放す。捨てる。なかなか決断するのはむづかしい。置いておくのもタダではない。古本屋の先輩が言っていた。「本の終わりを決めるのも古本屋の仕事のひとつ」売れる本だけを買取取るのではない。売れない本も引き取って処分する、それも本屋の仕事のうち、そう理解している。自分が買い、読んだ本を処分するしかない痛みを、代わりに引き受け

る。それも本屋だ。

「それならとりあえず、何も考えずに持つてきてみます」しばらく沈黙していたKさんは、思い立ったように言い残して暑い路上に出ていった。

七月、島根に出かける。入江さんが運転手をしてほしいというのだ。本屋がどうかいろいろとあるのだが運転手をするのがよさそうだ。それで松江に行けるのなら何もいうことはない。松江行きの始まりは、長谷川さんの「ああ、それは行くしかないみたいやなあ」というため息から始まった。巻き込まれるように、松江に行きたいという気持ちだけを持った四人がそろった。気持ちはあつて、何もいうことはないのだがスケジュールの調整に半年くらいかかった。主な連絡手段が「会って話すこと」なので、それくらいの時間はかかる。半年かけて松江を旅したと思えばなんと贅沢な時間だろう。実際は一泊二日であつたという間に帰ってきたのだけだ。

目当ての本屋を訪問し、図らずも町をぶらつき、途中熱射病のようなめまいを感じながら夜はまた別の本屋で入江さんの歌を聞く。入江さんは三十年以上前につくったという歌をノートの歌詞を見ながら一生懸命歌う。三十年ぶりに、とかではない。わりといろんなところで歌っている歌だ。

いったいいつになったら覚えるのだろうか。そのままとめない雑談の時間。松江の話聞きながら急に、実は松江に来るのははじめてではないことに気づき驚く。もう十年以上前、本屋の先輩に今井書店の創業の地に連れて行ってもらったことがあった。その時も松江に一泊し、翌日は鳥取に向かったのではなかったか。はじめて定有堂を訪れたのもそのときだ。すっかり忘れていた記憶を独りたどっていると散会していた。夕食に入った居酒屋で、入江さんと山本さんがそばを頼む。居酒屋のメニューに手打ちそばがあるとところに松江を感じる。うまい。「ひとに迷惑をかけない」と入江さんはいった。

旅の終わりは二日目の朝、気づいたら終わっていた。四人が三人になり、突然一人になった。「それじゃ、また」という声が聞こえた気がしたがもうわからない。帰り道にはもう次の日常が始まる。仕事の段取りをしながら家に帰る。

開風社

〒602-8125 京都市上京区大宮通樺木町上る菱屋町8  
18

080-3166-1385

info@kaifusha-books.com

http://www.kaifusha-books.com

# Ballad Of A Landlord

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

最近仲良くしてもらっている写真家のSさんに、ずいぶん前から「スタジオにも遊びに来てくださいね」と言われていたが、タイミングが合わず先延ばしになっていた。

やっと都合がついて、共通の友人TKさんと一緒にお邪魔した。

そこで開口一番

「実はこの場所を立ち退かないといけなくなつたんですよ」

Sさんのスタジオを含めて周辺の建物をすべて潰して、マンションか何かが建つらしく、最初で最後の訪問になつてしまった。

元々は古い工場兼倉庫で、写真家Sさんと様々な空間づくりを手掛けるTMさんとで、少しずつ改装して作り上げたそう。

ペンキの跡が残る床、さび付いた鉄柱、丁寧に配置された

ソファと、無造作に置かれた(ように見える)アンティーク雑貨やトルソー。それらとは対照的に中央にしつらえた、四方が真っ白に塗られたスタジオ。圧倒されるのに心地よい空間だった。写真やアートの話から、仕事に関するリアルな数字(売上やら家賃やら)まで、気づけば三時間ちかくおしゃべりしていた。

この場所がなくなるのはとても惜しいが、スタジオの移転先は当店の近くなので、それはそれでちよつとうれしかったりする。

「最初で最後の訪問」のはずだったが、後日行われたガレッジセールにもお邪魔した。魅力的なオブジェや家具が、今回は売り物として並んでいる。

悩んだ末に某特撮もののパッケージがほどこされた梅酒と、オンライン会議で使えそうなマイクを譲っていただいた。

最後にもう一度あちこち見て回りながら、数年前に大炎上した案件に巻き込まれて、大きな仕事が消滅した話を聞いた。仕事はほぼ終わっていたのだからとギャンラはもらえたそうだが、身近にリアルな被害者がいて驚く。

\*

よく来てくださるお客さんからの買い取り依頼があり、



古い建築雑誌を預かった。「SD」の創刊号や、倉吉市庁舎が取り上げられた「新建築」など、貴重なものも含めて七誌、合計で四百冊ほどあった。もともとも古いものは一九五二年の「新建築」で、これから日本が復興していく熱量を感じる。

また七〇年代後半から八〇年代半ばあたりは、建築と現代思想が近い時代だったので(いわゆるニューアカ)、人文系の研究者や芸術家の連載や論考が増え、ここにもまた時代の熱量を感じた。

誰の言葉が、誰と一緒に掲載されているか。単行本だと見えてこない時代性が、雑誌には表れている。

と個人的に楽しみつつ、あくまでも商売なので、作成したリストを建築関係の方や、建築や写真が好きなお客さんに送り、「貴重なのでお早めに」とセールスに努めている。

\*

お店の斜め向かいで、工事が始まった。たまに商店街のイベントで使われたりもしていたが、長い間空き店舗になっていた場所。洋品店だったのか、ショーウィンドウには昭和っぽさ全開の、趣のあるカーテンが備え付けられていた。

「あの佇まいは残してほしいよね」

と友人とも話していたが、工事が終わるとききれいなガラスのドアに入れ替わっていて、少し残念だ。いずれにしろ、近くで新しい動きがあるのはとてもよいことだ。

あえて何ができるかは確認していない。

#### 【参考文献】

『仕事が途切れない個人事業主・フリーランスがしていること』藤吉豊 日本実業出版社  
当店でコンスタントに売れている定番品。切実な問題だ。

『エッフェル塔試論』松浦寿輝 ちくま学芸文庫  
建築、ではなく表彰文化論で、松浦寿輝の代表作。何度も読んだ名著だが、版元品切れ。

『あしたの風景を探しに』馬場正尊 ちくま社  
リノベーションやまちづくりの第一人者による、働き方／生き方をめぐる思考と記憶の雑想記。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

## 本を作る側から (31)

村瀬 謙介

(小取舎)

クラフアンのリターン作業やトークイベントの準備という言い訳により、前回の音信不通の入稿がとんでもなく遅れたので、「次回は早めに出します」と奈良さんとドラマリアさんに宣言したのにもう締め切りが目の前。テキストを打ち込むページはほぼ真つ白で、早めに出しますと意気込んだ前回の最後に自分が打った『悪童日記』という文字。俺は時間がないのにこんなことをテーマに書くこうと思っていたのか。ただ、いつかは書くこうと思っていた。なぜなら二十歳前後に読んで強烈に印象に残っている本だからだ。

音信不通の読者は読んでいる方も多いであろうアゴタ・クリストフの小説『悪童日記』は、一九八六年にフランスで出版された。著者はハンガリー出身で、亡命先のスイスでフランス語を習得し、母語ではない言語で執筆した点も大きな話題となった。亡命文学とも呼ばれる。

簡単に本作を説明すると、戦時下のある町に疎開した双子の兄弟が、冷酷な日常を生き抜くために感情を殺し、徹底した「事実の記録」として日記を書き続けるという内容(実際のタイトル *Le Grand Cahier* を直訳すると「大きな帳面」という意味)。日記を書いているのは双子なので「僕ら」という一人称複数で物語が進行する。文体は極端に簡潔で、修飾語や心理描写を排し、出来事だけを短い文で積み重ねる冷徹な記録風に仕立てられている。この「心理描写がない」という手法に、青年だった私は感動した。映画のシナリオでは喜怒哀楽、驚きや申し訳なきなどの感情は、目にみえる(カメラに映る)表現に置き換えねばならない。登場人物に感情を口で言わせるのは技がないとも教わった。だが、シナリオとは違い文章内で感情を吐露できる小説でそれをしない文体に衝撃を受けた。本作中では双子が日記のルールを決める。例えば、

「おばあちゃんは魔女に似ている」と書くことは禁じられている。しかし、「人びとはおばあちゃんを〈魔女〉と呼ぶ」と書くことは許されている。(中略)「従卒は親切だ」と書けば、それは一個の真実ではない。というのは、もしかすると従卒に、僕らの知らない意地悪な面があるのかもしれないからだ。ぼくらは単に、「従卒はぼくらに毛布をくれる」と書く。

といった具合に。

ヨーロッパ文学においては、戦争文学の枠を超え、言語の極限の実験でありながら普遍的な暴力と生の問題を描いた衝撃作と受け止められた。今の世の中を見ても戦争が過去のものではなく、著者が子供時代に戦時下を過ごしてきたリアリティーがある。一九八八年のインタビュでアゴタは、「戦争は日々の一部でした。平和ってどんなものだろうと、興味津々でその到来を待っていました」と語っている。

『悪童日記』と、その二作目『ふたりの証拠』は若い頃に読んでいたが、完結編と位置付けられる『第三の嘘』は未読だったため、図書館に借りに行った。すると思ったよりも分厚くない。「あれ?」と思い、書庫から『悪童日記』も出してもらった。すると二〇〇三年で三刷の文庫だった。当時はハードカバーで読んだからか重厚な本だった記憶だが、この文庫をめくるとあっという間に読めそう。また、あの衝撃の最後を読んできました。

さて、今回もう一つ併せて書こうと思っていたのは、当時、連載途中にも関わらず、手塚治虫文化賞マンガ大賞を獲得した浦沢直樹の『Monster』。ベルリン崩壊前後のドイツが舞台で、『悪童日記』のように双子がキーワードとな

る。だが、残り文字数が少なくなったので割愛しよう。またいつか書くのだろうか。わからないが。

今年の夏は戦後八〇年ということで至るメディアで「戦争を繰り返してはいけない」という言葉を見たり聞いたりした。その言葉に違和感を覚える。繰り返すが戦争は過去のものではない。マイナカード発行やコロナワクチンの時のように「のせられる」と、目の前に餌をぶら下げた「ネオ徴兵制」にもまんまと騙されてしまうんじゃないか。

嗚呼、建国して一七〇〇年間戦争をしていないサンマリノ共和国に行ってみたい。

#### 小取舎の最新刊

『「見る場所」のメディア考古学―鳥取から日本映画史を描き重ねる』佐々木友輔・杵島和泉・Ciara 編著

本体二七〇〇円 発行 2023.9



## 内坪井町日記（17）

齊藤 仁昭

（ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務）

八月某日

新商品の開発やらクリスマス商品の準備やらでわちゃわちゃと忙しい。連日三十五度以上の気温で頭がぼんやりしすぎて考えが何もまとまらない。一か月くらいの夏休みが欲しい。麦茶に必ず氷を入れてしまうので胃腸の調子が微妙。

八月二十八日

computer fightの企画「世界の果てのぶっ壊れるような邂逅」に呼んでいただく。初めて新代田のFEVERにてライブ。ほかにはPereiraとTexas3000が出演。

computer fightは最近気になっているバンドでちよいちよい聴いていたのだがまさかオフアをいただくと

は思っておらず、当日まで別のバンドと間違えてオフアくれたのではないかと心配だった。彼らのリハを聴いていたが、ヘビーだし切れ味は鋭く、迫力が桁違いで委縮してしまふほどだった。

我々のリハの番がくる。そしたら、会場の音響がとてもとてもとつてもすばらしく、演奏が快適すぎて上手くなつたような錯覚を覚えるほど。緊張も委縮も解けて、これならいけそうという感じ。会場が広いからこんな音響なのだろうか。

本番。Pereiraからスタート。音が尖っている。三人が探り合いながら演奏しているのだろうか。即興の部分と作曲の部分の混ざり方がいい。ドラムスがすごかった。こういう迫力を出さないと、大きい箱ではお客さんに通用しないのだろうな。課題を与えられた気分。精進します。

二番手が我々。お客さんの入りも悪くなく、若い方が多いようだが曲に反応して踊ってくれている。いいい。それにしても音が良すぎる。もっと続けたいと思ってしまう。演奏のあとcomputer fightの千川氏にもよかったと言ってもらった。ナイスビートでしたよとのこと。ありがたや。いやー、夏にたくさんライブしといてよかった。平日木曜に無理して上京した甲斐があったものだ。

三番手は以前一度だけ一緒にやったことがあるTexas3

000。演奏のスケールがめっちゃめっちゃでかくなっている。ドラムの迫力がこれまたすごかった。テクニクもすごかった。酔い方もなんかすごかった。デカいバンドになっていくのではなからうか。

トリのcomputer fightはもう会場もあつまっているし、これまでの3バンドも煽っていたしで、ステージも客席も爆発。隙のないおそろしい演奏で踊る。終演後に物販にてcomputer fightとTexas3000のTシャツをゲット。

余韻にひたりたかったが、翌日は始発にて帰宅せねばならないため早めに切り上げる。帰熊後、めちゃくちゃに働いた上、中学校やテレビ局にも訪問せねばならないという無茶なスケジュールだった。

八月三十日、三十一日

無茶をこなした翌朝はまたもライブ。FEVERが楽しすぎたのであまり疲れはたまっておらず快調。今回は、名古屋の金山にあるブラジルコーヒーという喫茶店にて「ケバブ夏のジョンソン祭り」を企画していただいた。初日はワンマンで、二日目はソウイチさんと、ペンペンドンピーとのスリーマン。

企画者はブラジルコーヒーのボス角田さん。角田波健太

波バンドや、ピラミッドなどのバンドにて美しいギターとボーカルを奏でるプロレス好きのナイスガイ。角田さんの音楽をみんな聴こう。

今回は家族四人で旅行がてら訪れた。子は初めての飛行機だったがぜんぜん怖がらず楽しんでた。せっかく家族できたのだが、予想気温四十度という初めて見る数字をたたき出す名古屋の暑さ。行こうと思っていた動植物園はあきらめる。

初日のワンマン。こないだライブやったばかりなのでバンドの呼吸はよくあっている。二部構成で二十七曲くらい。

「君はアフリカ」という曲の間奏で佐藤君のギターソロがあるのだが、いつもその間奏を聴きながら彼と出会った中学生の頃を思い出してしまふ。あれから三十余年経つがその時間が一瞬のようだったと思ったり、ものすごく長く感じたりしたりしているあいだにギターの音色が美しく感じているとシンバルの揺らし方に感情がこもってしまう。つづく。

## 論語について(5)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

子曰、君子、食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、就有道而正、焉可謂好學也已矣、  
(学而篇第一・第十四章)

子(し)曰(い)はく、君子は、食飽(あ)くことを求むること無く、居安(やす)きを求むること無し。事に敏にして言に慎しみ、有道に就(つ)きて正せば、焉(すなは)ち好學と謂(い)ふべきのみ。

「君子」は、理想とすべき人格者の意味。「食」「居」いずれにも満足を求めないのが「君子」だと言うのである。「事に敏にして言に慎しみ」からが後半だが、その意味は「巧言令色、鮮(すく)なきかな仁」(学而篇)にも通じ、口先だけにならぬよう機敏に動き、言葉は控えよと言うのである。里仁篇には、「子(し)曰(い)はく、君子は、言に訥にして行に敏なら

んと欲(ほつ)す」とあるが、同じ意味だろう。そして、このように機敏に動くためにも、君子は「有道に就(つ)きて正す」ことが必要だと言っているのである。この句の意味については、「必ず有道の人に就(つ)きて以(もつ)て其(そ)の是非を正せば、則(すなは)ち好學と謂(い)ふべし」と説く朱子の注が理解しやすい。

ここで本章に見える助辞に注目したい。先ず、「就有道而正焉」の「焉」について。これは多く特定の語気を示す句末の助辞で、「就有道而正焉、可謂好學也已矣」の句は、普通「有道に就(つ)きて正す、好學と謂(い)ふべきのみ」と訓読される。が、右の朱子の注にも「正せば、則(すなは)ち」とあったように、本章の「焉」の語は、上の句と下の句とで順接条件を形成するから、これを句末の助辞ではなく、「すなはち」と訓読する接続の助辞だと見たい。これについては、楊樹達が『詞詮』で「焉」を「承接連詞。乃也、則也」と説明した上で、十一の用例を紹介しており、うち四例(七教修、焉可以守、三至行、焉可以征)(『大戴礼記』王言、「吾道路悠遠、必無有二命、焉可以濟事」)(『国語』呉語、「勝無非義者、焉可以為大勝」)(『管子』幼官、「分議者延延、而支苟者諮諮、焉可以長生保国」)(『墨子』親土)が「焉」の後に「可」の語をとり、本章と似た句の形になるのをその傍証として挙げておく。

次に、「可謂好學也已矣」の「也已矣」について。「也」「已」



# 花鳥風月

古賀 啓三

(米国ミシガン州在住)

六月の初め、家の周りにブラック・アイ・スーザン(中央の目、黒いコーンから、黄色い花弁が放射状に広がる花)が点々と姿を現し始めるのを認めた家内の、安堵の方が勝った喜びに、こちらもほっとする。用心深い開花が、音合わせでもするかのように、数日間、散発的にあちらこちらでなされたあと、指揮棒が振り下ろされ、一気呵成に咲き乱れる黒と黄色の氾濫に息を呑む。複数の種の混生を予想していたので、ブラック・アイ・スーザンだけに埋め尽くされたフィールドは透徹した大音響のような印象を視覚に与える。

大音響、という印象は多分黒と黄が被うフィールドの広さから：

二年ほど前、家を建てるために購入した土地の広さが二・五エーカーで、これはおおよそ三千坪。日本人の知り合いに言うところと驚かれるが、アメリカは土地が安く、僕らが棲むこと

に決めた山奥だと、日本に比べれば、ただ同然である。

森を切り拓く必要があり、僕の希望としては建物の周りにいくらか樹を残したかったのだが、水捌けだか、何かの理由で全て伐採されねばならず、樹林に囲まれた二千坪ほどの、フィールド・オブ・ドリームスのような、裸の空間が出現した。老夫婦の隠居所帯なので建坪自体は狭い、その周囲に広いフィールド(もしくは庭)が生じてしまったのだが、これを全て芝にすると、芝刈りが、老人には無理。加えて、芝刈りの相場は、お爺さんの仕事である。無理！絶対無理！と駄々をこねたら、じゃあ芝ではなく、Meadow、草原風にしよう、と家内。なるべく何もしなくていい、自然のままに。そういう趣味の人は結構いるらしく、Wild flowers、野生の花の種子をネットで販売している。住んでいる地域、我々であれば中西部、Mid-west assortment なんてのがあり、これはこの地域に適した花、数種類の種子の詰め合わせ。

新しい家には一昨年十一月末に入居し、周囲のフィールドは掘削後、整地されただけの剥き出しの土で、翌年の春以降、そこにはフォックス・テールという雑草が繁茂した。この草はDisturbed soil、乱された土壌を好むらしく、工事で掘削された土地は教科書的 Disturbed soilである。昨年一杯、その雑草の除去と地味を肥やすことにかまけ、春



を待ちかねて、祈るような気持ちでの種時きであったので、ブラック・アイ・スーザンが咲き誇った際の家内の安堵と喜びは、そうならなかったシナリオでの慰撫の労を思い遣ると、こちらをも深く安堵せしめるのであった。

しかし、複数種混合した assortment の種子のはずなのに、なぜブラック・アイ・スーザン一色だったのか、という幾許かの疑念は、咲き終わって、野原は四分音符を逆立ちさせたような、黒い目だけになり、楽章と楽章の間のような二週間ほどの静寂を経て、ブランケット・フラワー、コスモス、ゼニア、メリーゴールドが、緩徐楽章のペースで、順を追って開花するのを見て解消した。種子の assortment が、時間差で咲く配合になっていたのである。

このような Meadow、草原風に到達するには二、三年はかかるであろう、と予測していた我々にとっては嬉しい誤算であった。そしてこれは両者をリンクして考えたことがなかったもので、より一層嬉しかったのは、家内の影響で僕も楽しむようになっていたバード・ウォッチング、訪れる野鳥たちの観察が、色鮮やかになったフィールド／庭を背景に、より絢爛となったことである。この世のパラダイスと言っても過言ではない。Wild flowers の中にも自然の産物とは思えぬ美しさのものがあるが、ローズ・ブレストッド・グロス・ピーク、バルティモア・オリオールズ、ゴールドフィンチなどとい

う鳥たちの色調や意匠の卓抜さには息を呑む。僕的には、神さまの存在の最も説得力ある徴(しるし)かもしれない。それは、生存とか繁殖とか進化の基調となる機能美などでは決してなく、純粹なけれどもある。神々が、手さきびでデザインセンスを競ったとしか思えない。

ブラック・アイ・スーザンが咲き終わる前に、その美しさを一目見せようとシカゴに住む友人夫婦を招いたところ、花を愛でるだけではなく、庭に来る鳥のこともよく知っていて意外であった。妻君など Zebra という、鳴き声から種類を同定するアプリマでスマホに入れていて、都会居住者にそんな趣味があるなんて驚いた、と伝えると、「年寄りには花だの鳥だのが好きなのよ、暇だから」

僕はその言葉の真実に返す言葉がなかった。もし僕が四十代でこの家に越して来ていたら、庭の花や鳥に血道を上げたたりしたであろうか。呑んで暴れるのに忙しかったあのころ、その確率はゼロである。

とここまでが導入部で、老人ならではの観点だの感性、老人の感性など衰えに過ぎないのか、とか考察してみたかったのだが紙数が尽きた。谷崎や川端を師とする「老人小説」には是非挑んでみたい。

## オトラントの彼方へ ～紀田順一郎氏逝く～

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

紀田順一郎氏が亡くなった。享年九十歳。

この春に、氏の業績を振り返る雑誌の特集号「書物百般・紀田順一郎の世界」(「近代出版研究」第四号)が出たので、かなり悪いのではないかと心配していた矢先のことであつた。

初めて氏の名前に接したのは昭和四十年代も終わりの中学時代。雑誌『幻想と怪奇』、及び全集『怪奇幻想の文学』(新人物往来社)の編集者として、であつた。

いずれも、既に新刊では入手不能になっていたので、前者は古書店で、後者は出版社に手紙を書いて(この方法は、はしなくも氏の著書に教わったものである)第一巻のみを入手。営業担当者が倉庫を探してくれて、擦り切れたらけの箱入り本を送ってくれた。残りの巻は、これも不思議な事ながら、市内のN書店で廉価で手に入れることができた。

筆者にとって、氏は、何よりも幻想文学の水先案内人であつた。ほどなく、『世界幻想文学大系』(国書刊行会)という古今未曾有の大企画を引つ提げて再び現前。畳みかけるように、『ドラキユラ叢書』を世に送り出す。素人目に見ても「大丈夫か?」と心配された。

編著『出口なき迷宮』(牧神社)は、このジャンルの(恐らく)わが国初の総括的な入門書であり、今なおその光輝は褪せることが無い。

相前後して、『現代人の読書』(三一新書)を読んだことで、新刊、古書を含め、科学的かつ効率的な本の探し方、入手の仕方を学ぶことになった。これは大きかった。地方にながらにして、欲しい本を手に入れるには、これしかなかった、と断言できる。

今、同書を読み返してみると、隅から隅まで行き届いた、読書人たらしとする者のための、正にバイブルと呼ぶべき書である。

東西の読書論から筆を起こして、必読書リスト、愛読書、愛書家とはいかなるものか、書齋に揃えるべきもの、蒐書の仕方、蔵書の技術、さらにはデータ整理・保存の方法に至るまで、痒いところに手が届く入門書である。本の入手方法な

ど、ごく一部に過ぎない。

もとより、現今の出版界の凋落ぶりは目を覆うばかりで、書物神話も崩壊途上にあり、必読書は言うもさらなり、情報技術も進展著しく、現代の目で見れば内容の古さは如何ともしがたいが、昭和三十九年初版のこの本を二十九歳で世に問うた著者の才は恐るべきものがあるう。

高校の時、併せて、『読書戦争』(三一新書)を読んで、俄然、出版流通の世界に興味を持つようになった。漫然と本屋に入荷するのを待つだけでは、欲しいものなど手に入らないという仕組みがよく分かった。流通を知悉し、上手に利用し尽くすことが重要と肝に銘じた。

その後も氏は、活躍の幅を広げ、辞書、活字文化、図書館、コンピュータ、データベースの歴史から映画の収集(ビデオ発売以前である)など、その成果を次々と開陳。手書きカードから始まって、ワープロ、パソコンと最新の情報機器を用いた情報整理に飽くなき探求を続けた。

書物学、読書論においては最早右に出る者はなく、『本の情報事典』『内容見本にみる昭和出版史』『古書街を歩く』

『図書館活用百科』『知の職人たち』『日本語大博物館』『大漢和辞典』を読む。パソコン宇宙の博物誌『日記の虚実』『日本博覧人物誌』など、名著を挙げるに暇はない。

ミステリに関しては、学生時代から論客として知られていたが、後に自身も実作を手掛けるようになり、へ古本屋探偵」というユニークなキャラクターを生み出した。創元推理文庫に全作がまとめられている。本をめぐる狂気の世界を垣間見るに、これに就くに如くはない。

末筆ながら、筆者が小著を上梓した際、その道の導き手たる氏に一本呈上したのは理の当然であった。すぐに返事があり、全編に目を通した上での感想と、ききやかなミスの指摘を頂いた。年少者だとして侮ることのない学究の人であった。

泉下での平安を願って止まない。

(編集部注)

村上博美『幻想書誌学序説』青弓社 1993

## イギリス留学記①

### 「やっと実感が湧いてきた」

三浦 永理

(三十歳・女性)

とこの二ヶ月ほど繰り返していた。

九月十九日の朝九時四十五分。羽田からイギリスのロンドン・ヒースロー空港へ旅立った。

フライトは十四時間。昨今の情勢によって、北極を回るルートである。飛行機に乗って、日本の土地から浮き上がった瞬間、私の旅は始まった。やっと実感が湧いてきた。

九月はなるべく予定を入れないでいようとしたものの、文学フリマ大阪に出ることになってしまったし、八月が資格に関する研修で忙しかったので、友人たちによる壮行会も九月にしてしまった。なるべく予定を入れないでいようとした？ そんなの嘘だと思われるけど仕方ない。

鳥取には五年もいて、一年間の留学の後は二年間自国に帰るようビザによって制限されている今回よりも、はるかに長い旅だったのに、その時よりも盛大に見送られたので、これはどうも大事なひと、やっと実感が湧いてきた。

十年前、交換留学をした時も、トルコには一年間、正確には十ヶ月しかいなかった。つまり、私の生涯の伴走者である本をそこまで持ち出さなかった。今回は学位を取得する目的があるので、それなりに資料も持っていきたい。私の後を追って本を一箱送ることにしている。

ということ、引越しまとめた本のほとんどは実家に置いていくのだが、置いていかれる方からしたら、たまったものではない量の本を置いていくことになる。申し訳ない。(この機会にアプリに登録してみたら、だいたい千冊ほどあることがわかった。といっても、引越す前にSHEEPSHEEP BOOKSさんに渡した分もダンボールで六箱、知り合いにもあげたものだから、一五〇〇冊近く、1Kの部屋に押し込めていたことになる。)

本を持っていくにしても選ばなくてはいけない。それが異国の地に移るといふことかもしれない。それもビザの関係で一年だとわかつているからこそ、全てを持っていくわけにもいかない。本を選び、泣く泣く諦めたりする中で、やっと実感が湧いてきた。

といっても、結局当日の朝まで荷物の出し入れは続く、荷物持ちとしてついてきてくれた父も、私も、スーツケースが重いと言われて、荷物預けの場所で手荷物に移し替えたり

する羽目になった。「なんでこんなに本があるんだ。いるのか？」と父に言われながら、「だって研究するんだから必要でしょ」と母がフォローする。正直いらない本もあるのかもしれない。けど、読書は楽しみのためでもある。

数日前の文学フリマ大阪では、一四〇〇近いブースがあり、私たち「らくだのこぶのビオトープ」の存在感風前の灯だったが、今回は仲間で作成したアンソロジー『砂塵 SAND』のお披露目の場でもあった。留学前の決意をまとめた『思わず、涙さん』も持ち込んだ。

そのなかで、やたらと列のあるブースが目についた。ナナロク社だった。特典の葉がにくい。たまたま著者の方がいたので一冊買って、サインをいただいた。

それが、初谷むいさんによる『笑っちゃうほど遠くって、光っちゃうほど近かった』だった。なんでも月生まれの子が、地球に来て一年間を過ごした設定で、書いた短歌をまとめ直した本らしい。それを買った私も、生まれた場所を一年間離れるので、運命めいたものを感じていた。それを持ち込んで、離陸した。

女の子の瑞々しい感性が地球をとらえていく。普通の日常が違ったように見える。そして、恋の予感。そういうスイトな面から、現実をとらえるような歌まで、月から来

たような異質さを感じる。

これを書いているのは、まだイギリスについて二日目。寮に入ったものの、連れてきた父を放つても置けないで一緒にいる私である。(色々と初期費用を払ってくれるのでありがたいかぎり。)

父からすれば、仕事から離れた「リフレッシュ休暇」の一週間なので、あれもこれも目移りするようだ。私からすると、これから始まる人生を賭けた勝負の一年の始まりの一週間なので、ぼちぼちやりたいのだが。これが観光客と滞在者の視線の違いかもしれない。私は観光客ではないのだと、やっと実感が湧いてきた。

近くのスーパーに行ったら、その並びに「Bookshop」が見えた。なんでもない本屋かもしれないが、店員のおすすめ本が飾ってあったり、本のカバーが隠されたBlind Dateの本が売ってあったり。棚にYoko Ogawaの名前を見つけて、『密やかな結晶』は『The Memory Police』を知ってる？

ん？滞在二日目にして、本屋に入ってしまっただとう？

ご安心ください。まだ買ってはいないので。

## 列車と冬瓜

あきの素生

(くうねるめがね)



やっぱり列車に乗るのが好きだ。自分で運転していないので景色が楽しめるし、がたんごとんというリズムが心地よい。朝早い列車に乗るときは、大体いつもよりかなり早起きをしているので、車窓を眺めているうちに瞼が降りてくる。そんなときは、窓枠に頬杖をついてうつらうつらしながら、でも降車駅を乗り過ぎさないようにどこか覚醒しているような意識の持ち方で、がたんごとんと揺られていく。

といつても、長時間、ひどく揺れる路線を走るときは、めっっぽう酔う。車よりは酔いにくいので、移動中に本を読めるのが列車移動のよいところのだが、揺れるとどうしようもない。酔うのが嫌で、なんとか寝てやり過ぎそうとしたものの、目が覚めたら酔っていたなんてこともあり、乗り物に酔いやすい自分の体質には閉口する。

ただ、酔い止めはよく効く。子どもの頃、車で紅葉狩りに行くと、必ずといっていいほど猛烈な眠気に襲われた。窓の外の紅葉とか見てる場合じゃないほどに。ところどころで車を降りて紅葉を眺めたり、きのこや山菜を使った料理が食べられる山の中の小さな食堂でご飯を食べたりするときだけなんとか目を開けて、あとはぼぼ寝ていた。家に帰ってからも、なんかずっと寝ていた。これって毎回飲んでいる酔い止め薬が原因じゃないかと気づいたのは、結構大きくなってからだ。それからは、酔い止めを飲むのを避けている。失うものの方が大きい気がして。高校生になるとバス通学で多少鍛えられ、子どもの頃より乗り物酔いしづらくなったことも、酔い止め離れの理由のひとつだ。今では「眠くならない」と銘打った酔い止め薬もあるのだから、もっと快適に乗り物に乗れそうなのだが、なんとなく酔い止めに頼らず、酔うか酔わないか、薄氷を踏むような気持ちで列車に揺られている。

まったく関係ないが、冬瓜も好きだ。たまたまスーパーで見かけ、喜んで手にした。冬瓜の旬は冬じゃないんだな、とここ数年で遅まきながらわかってきた。名前の由来は、保存性にすぐれ、冬まで貯蔵できるからなのだとか。そんな

な名付け方ある？と思わなくもないが、百科事典※に書いてあるからそうなのだろう。

冬瓜はもっぱらスープにする。小さい頃に食べた記憶はなく、いつの頃からか食卓に登場するようになった。高校を卒業して一人暮らしする際に、母にレシピを習ってメモ帳に書きつけているから、よほど好きだったのだと思う。

丁寧につくるときは、大きめに切って皮をむき、種を取った冬瓜を米のとぎ汁で下茹でしてから、鶏肉と一緒にスープに入れる。鶏肉はひとくち大に切り、塩と料理酒で下味をつけておく。スープの味付けは、かつお出汁と醤油、鷹の爪。最近では、気に入りのあご出汁を使い、市販の白だしやうどんスープの素を合わせることもある。

冬瓜は下茹でしているから、鶏肉に火が通るくらい、を目安にスープでことごと煮込む。透きとおった薄い琥珀色のスープの表面に、鶏肉の脂が丸く浮いてきらきらと光る。冬瓜は、スープの色に染まり輪郭をくたくたと緩ませている。輪切りにした鷹の爪の赤がぴりりと効いて、優しいだけじゃないわよと控えめに伝えてくる。華やかさはないけれど、透明感のあるきれいなスープだなというも感じる。

お出汁と鶏肉の味を吸った冬瓜は、ちよっと歯を当てた

だけで、ほろほろと崩れていく。熱さを逃すためにはふはふしながら、口の中で転がすように味わう。素材自体に癖がないので、さながら「噛めるお出汁」である。長時間煮込んだような柔らかさと素直な味わいが冬瓜の魅力だと思う。

あつさりしつつも、冬瓜にこもった熱が体をあたためてくれる。少し涼しくなってきたこの時期にぴったりだ。夏に食べ切れなかった素麺を入れて、にゅうめんにするのもいい。冬まで貯蔵しておくことは、とてもできそうにない。

※『日本大百科全書』『ブリタニカ国際大百科事典』『コトバンク』 (<https://kotobank.jp/>) より

## 案内

ドラメリア (座敷わらし)



定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん (県民) 文化会館

葉香太極拳クラブ

会場 麒麟スクエア (市役所二階 水曜夜・土曜昼)

・定有堂教室と太極拳の詳細は  
下記の、QRコード参照

(@ドラメリア)



『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー

・エスキース (倉吉) ・森の生活者・邯鄲堂・

・SHEEPSHEEP BOOKS (定有堂ビル2階)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部

・編集後記:

『猫は、うれしかったことしか覚えていない』というタイトルに  
キュンときて、図書館で借りてみました。楽しい記憶だけが残  
るっていいですね。そうなたらな、と思う秋二〇二五。本は  
猫あるあるエッセイでした。

ドラメリア (編集長)

「音信不通」に寄稿されていた木元健二さん。

「この本の出版のため休載されましたが、このたび完成。

『セツと八雲』朝日新書。小泉八雲のひ孫さんにあたる小泉  
凡さんのインタビュー本です。木元さんは新聞記者ですが、  
いつも自分でテーマを探し紙面に企画連載をされます。松江  
勤務のときも何本か連載をされています。その一つを元にし  
たのがこの本です。とても丁寧な仕事の積み重ねです。

奈良敏行 (発行人)

